

「何の権威で」 マルコによる福音書 11章 27～33節

今日の聖書のテーマは「イエスさまとは誰か」そして「イエスさまの権威の源はどこにあるのか」ということです。「権威」とは優れた者として他者を従わせる力の事です。イエスさまの権威、人々から信頼され人々を従わせることができる特別の力は一体どこから来ているのか、今日の聖書から学びましょう。

イエスさまがエルサレムに入城されて3日目の話です。イエスさまは1日目にエルサレム神殿をじっくり見て回られました。エルサレム神殿の一番外側の異邦人の庭は、犠牲の動物を売ったり、神殿税の両替をしたりする商売人であふれかえり、騒がしい市場のようで、外国人の人たちが静かに神ヤハウエを礼拝するのを妨害していたこと、祭司のリーダーたちが金儲けの事ばかり考え、私利私欲に走り、形だけの礼拝をささげていたことに対して、イエスさまは激しい怒りを覚えられました。そして2日目に異邦人の庭で商売人の机やいすをひっくり返し、暴れまわり、商売人を異邦人の庭から追い出すという激しい行動をとられました。これを宮清めといいます。しかしこのイエスさまによる宮清めとイエスさまの教えは、ユダヤの宗教的・政治的指導者たちを激怒させました。イエスさまから自分たちの問題点、一番痛いところを突かれたからです。

ローマ帝国の支配下でユダヤはある程度の自治が認められていました。自治の中心になっていたのが、ユダヤの最高議会サンヘドリンで、そのメンバーである祭司長たちや律法学者たちは自分たちを守るために、自分たちの立場を揺るがすイエスさまを殺すしかないと思い、相談を始めたのです。

ユダヤの最高議会の議員たちは、イエスさまによって自分たちの問題点、一番突かれたくない痛い所を突かれ、激怒し、このままでは自分たちの人々を支配する権威がなくなってしまう、既得権益も失ってしまう、お金儲けできなくなる、経済的に豊かな生活ができなくなる、そう恐れたのです。そこで今日の聖書の権威論争が起こります。

エルサレム神殿で人々の神の教えを語っておられるイエスさまのところに、ユダヤの最高議会の代表者たちが近づいてきて、イエスさまに対して「何の権威で」エルサレム神殿から商売人を追い出したのか、イエスの権威はどこから来ているのかと問うのです。

28節「何の権威で、このようなことをしているのか。だれが、そうする権威を与えたのか。」と。自分たちは神さまから与えられた宗教的権威とローマ帝国から与えられた政治的権威、人々を従わせる力を持っているのだぞ。イエス、お前は一体何の権威で行動しているのか。誰がお前に権威を与えたのかと、最高議会の議員の代表者たちは言ってきたのです。

これに対してイエスさまは、ユダヤ教のラビ、教師がよくやる方法ですが、相手の質問にすぐに答えず、逆に質問を返されるのです。

30節「ヨハネの洗礼は天からのものだったか、それとも、人からのものだったか。答えなさい。」と。バプテスマのヨハネの洗礼は神さまから来たものか、人間から来たものか。つまりバプテスマ

マのヨハネの権威、人々を従わせる力は、神さまから来たものか。それとも人間が勝手につくりあげ、期待しているだけのものかという問いです。

バプテスマのヨハネはイスラエルに数百年ぶりに現れた神の言葉を語る預言者で、ヨハネが「こんな生き方を続けていたら、神さまの厳しい裁きを受ける事になるぞ。悔い改めに神さまのもとに帰って来なさい」と人々に語ると、多くの人たちがヨハネのもとに集まって来て、悔い改めて洗礼を受け、神さまのもとへ帰って来たのです。

今日の聖書の話の時には、すでにヨハネは迫害されて殺されてしまいましたが、ユダヤ人の多くの人々がバプテスマのヨハネは神さまが数百年ぶりに送られた偉大な預言者だと信じていたのです。ユダヤの最高議会の代表者たちはどう答えるか困ってしまいます。バプテスマのヨハネの洗礼が天からのものだと答えれば、じゃあ、お前たちはどうしてバプテスマのヨハネの語る神の言葉を信じ、従わなかったのかと言われてしまいます。もしバプテスマのヨハネの権威が人からのものだ。彼は神の遣わされた預言者ではない。みんなが勝手に期待しているだけだと答えれば、群衆はみなバプテスマのヨハネのことを神が遣わされた偉大な預言者だと信じているので、群衆が怒り出し、自分たちの言う事を聞かなくなってしまう。どうしようと悩み、結局、「わからない」とイエスさまに答えたのです。

彼らがわからないと答えたので、イエスさまも自分の権威がどこから来ているのか答えないとされたのです。

イエスさまは神の愛する独り子、神の遣わされた救い主、エルサレム神殿の主人でもあります。創造主である神ヤハウエの偉大な権威をもって、この地上で働き、神に背を向けて自分勝手に生きている人間を神のもとに連れ戻し、新しい命に生かすために、自分の大切な命をかけて働いてくださる救い主です。

大切なのは、自分との関係の中で考えることです。世の中では結構たくさんの人がそう思っていますねというような、一般論ではなく、自分の事として考えてみることです。

議会の代表者たちのように、自分の立場を守るために「わからない」というのは大切な事柄に謙虚に向き合って考えてみようとしないう態度です。

「私にとってイエスさまは誰なのか。イエスさまは誰の権威で働いておられるのか」という問いは私たちの信仰につながる重要な問いです。教会に来はじめたばかりの人、聖書を読み始めたばかりの人は、この問いかけにすぐに答えは出せないと思います。でもあきらめないうで、最高議会の議員たちのように「わからない」とごまかさないうで、ぜひ真剣に、誠実にこの問いに向き合っていたきたいと思ひます。信仰生活が長い人も同じです。「私たちにとって、私にとってイエスさまとは誰なのか」という問いは聖書の言葉を聞きながら、いつも自分に問いかけないといけません。毎週信仰告白で告白していても、いつの間にか慣れっこになってしまい、口でイエスさまは私の救い主ですと告白しても、信仰の炎はだんだん消えていきます。ぜひこれからも「私にとってイエスさまとは誰なのか」という問いを聖書の言葉を聞きながら誠実に考えて生きましよう。そして「イエスさまは私の救い主だ。私の人生を導いてくださる方だ」と心から信じ、告白できるようになりたいと思ひます。